

修士論文（要旨）

2014年1月

障害のある子どもをもつ母親の障害受容に関する研究

指導 茂木 俊彦 特任教授

心理学研究科  
健康心理学専攻

212J4053

萩原 可那子

## 目次

第1章 問題提起と目的	.....1
第2章 研究 2	.....2
2.1 方法	
2.2 結果	
第3章 研究 2	.....3
3.1 方法	
3.2 結果	
第4章 総合考察	.....3
資料	.....4
引用文献	.....5

## 第1章 問題提起と目的

わが子に障害があるとわかったとき、母親はその事実をいかに受け止め向き合っていくのかについて、多くの研究が行われてきた。母親の心理的変容について規則性を検討し、モデル化への試みや (Olshansky, 1962; Drotar, Baskiewicz, Irvin, Kennell, & Klaus, 1975; 中田, 1995; 牛尾, 1998; 山崎・鎌倉, 2000)、それに伴って、受容に影響を及ぼす要因の検討 (大野・長谷川, 2011)、そして、障害の種別による差異の検討など (夏堀, 2001; 柳楽・吉田・内山, 2004); 山根, 2010; 2011)、多岐にわたっている。先行研究をレビューしてみると、障害のある母親の障害受容は2つの側面を含んでいることがわかる。一つは母親自身の心理的負担や精神的健康に関する問題について、もう一つは障害のある子どもの変化や発達にかかわる問題に影響を与えるという2側面である。実際の支援現場では後者が重んじられており、母親は障害のある子どもを受容することが当然であるとされ、障害受容が課題のようになっているという (夏堀, 2003)。

障害のある子どもを抱えるということは母親には様々な困難があり、生活の制限については言うまでもなく、一個人としての生き方の自由度までもが狭窄される (藤原, 2001)。このような現実を踏まえると、母親の課題であり、いわば使命となっている障害受容について捉えなおすことはできないだろうか。母子の関係性を中心に考えられてきた障害受容について、母親も人生を生き抜く一個人であるという側面からとらえなおすべきであると考えられる。したがって、本研究では、従来の「障害のある子ども - 母親」の関係性に関する議論を一層深めるために、母親の一個人であるという側面に着目して障害受容について検討を試みる。

障害のある子どもの母親も、一人の女性であり、人生の設計と選択を行う存在である。研究1では、一人の女性であるという事実を加味して、子どもの障害の種類にはとらわれず、障害のあるわが子の受容について明らかにすることを目的とする。研究2では、子どもの障害の種類や程度に応じて障害のあるわが子の受容がどのように異なるのかについて検討することを目的とする。

## 第2章 研究 1

### 2.1 方法

障害のある子どもをもつ母親 10 名に対し、半構造化面接を実施した。質問項目は 1) 「わが子に障害があるとわかってから現在に至るまでの、具体的なエピソードやそこでの気持ちをできるだけ詳しくお話してください」と、2) 「ご結婚から現在に至るまで、ご自身でどのような人生選択してきたのかお話してください」の 2 項目を設定した。

分析は修正版グランデッドセオリー・アプローチ (M-GTA) (木下, 2007) を採用した。生成された概念および結果図の整合性については、指導者、研究担当者を含む合計 4 名で繰り返しの検討を行い、M-GTA 熟練者によるスーパーバイズを受けた。

### 2.2 結果

調査の結果、自閉症・非定型自閉症の子どもをもつ母親 5 名、重症心身障害の子どもをもつ母親 5 名の計 10 名であった (平均年齢 42.6 歳、SD=6.4)。また、子どもの平均年齢は、11.7 歳 (SD=4.8) であった。

分析の結果、生成されたのは 33 概念で、そのうちの 18 概念は、具体例に障害の種類による偏りが見られたため廃止概念とした。採択した 15 概念は、7 つのカテゴリーと 1 つの独立概念に分類された (Table.1)。また、それらをもとに受容の共通仮説モデルを作成した (Figure.1 : 資料参照)。

Table.1 カテゴリー及び概念

カテゴリー	概念
物理的な制限	外出時の制限 子どもの世話による生活の制限 生活のリズムが崩される
子があっての私	子育てに重きをおいている 子どもと共に生きる
この子の人生を受け止め共に歩む	親子共に厳しい子育て 断定的な進路決定
独立した存在としての子と私	子育て以外の模索 経験を活かした将来展望
この子の人生に寄り添う	調べることによる不安や心配の蓄積 診断された時のスッキリとした感覚 子どものことがわからない
ピアの存在	ピアサポート ピアの存在との比較による気づきや行動の変化
家族の存在	祖父母からの協力 夫の支え 夫の苦悩と空回り
<b>独立概念</b>	
専門家による支援や助言	

## 第3章 研究2

### 3.1 方法

研究1の分析で具体例が障害の種類による偏りが見られたために廃止された概念を対象に、研究1で作成した共通仮説モデルに当てはめ、探索的な検討を行った。

### 3.2 結果

研究1で作成したモデル（共通仮説モデル）に廃止概念を当てはめた結果、Table.2のような結果となった。廃止概念を適合したモデルは、Figure.2に示した（資料参照）。

Table.2 廃止概念を受容モデルに適合した結果

カテゴリー	概念
物理的な制限	① 障害による子どもの進路選択の制限（自閉）
	② 医療的ケア（重心）
	③ 生死の境目をさまよう子どもを抱える（重心）
子があつての私	④ 子どもと共に在る母親の将来展望（重心）
この子の人生を受け止め共に歩む	⑤ 受け止められないが子どもと向き合わなければならない（重心）
	⑥ ひとりの時間でリフレッシュ（重心）
この子の人生に寄り添う	⑦ 迷いや疑問を抱えた子育て（自閉）
	⑧ 大らかな気持ちでの見守り（自閉）
	⑨ 選択的な進路決定（自閉）
	⑩ 成り行きに任せた進路決定（自閉）
	⑪ 障害への気づきと楽観的思考（自閉）
	⑫ 子どもの将来への不安（自閉）
	⑬ なかなか行動を起こせない（自閉）
家族の存在	⑭ 祖父の思い（自閉）
	⑮ きょうだいの存在（重心）

## 第4章 総合考察

1. 「障害のある子どもをもつ母親の障害受容＝障害のある子どもを母親が自分の人生に引き受けていく」という視点によると、障害受容がプロセスではなく、様々な母親の状態像によって構成されていることが明らかとなった（共通仮説モデル）。
2. 障害の種類について考慮したうえで、共通仮説モデルについて検討してみても、障害の種類による差異は、共通仮説モデルの中に位置づくものであったため、障害の種類に関わらず受容について表現できる共通モデル作成の可能性を見出すことができた。

【資料】

以下の Figure 1 が研究 1 で作成された受容モデルである。カテゴリーを【】で、概念を〈〉で示した。

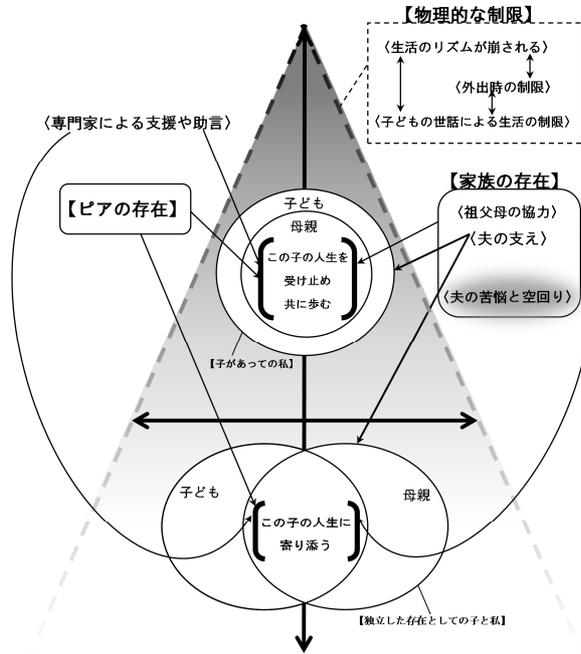


Figure 1 結果図

以下の Figure 2 が受容モデルに廃止概念を適合したものである。概念番号を①～⑮で表し、自閉症群の母親の語りから構成された概念を「自」、重症心身障害群の母親の語りから構成された概念を「重」とした。

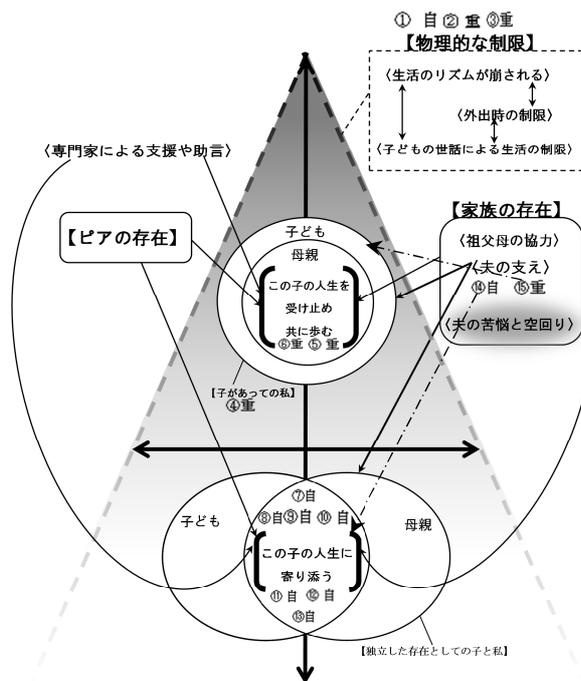


Figure.2 結果図

## 引用文献

- Dennis Drotar, Ann Baskiewicz, Nancy Irvin, John Kennell, Marshall Klaus (1975)  
The Adaptation of Parents to the Birth of an Infant With a Congenital Malformation:  
A Hypothetical Model. *Pediatrics* 56(5) 710-717.
- 藤原里佐 (2001) 障害児の母親の生活構造にみる特質と変化 教育福祉研究 第 7 号  
15-26
- 木下康仁 (2007) ライブ講義 M-GTA—実践的質的研究法 修正版グランデット・セオリ  
ー・アプローチのすべて— 弘文堂
- 中田洋二郎 (1995) 親の障害の認識と受容に関する考察—受容の段階説と慢性的悲哀— 早稲  
田心理学年報 第 27 卷 83-92.
- 牛尾禮子 (1998) 重症心身障害児をもつ母親人間的成長過程についての研究 小児保健研  
究 第 57 卷 第 1 号 63-70
- 夏堀撰 (2001) 就学前期における自閉症児の母親の障害受容過程 特殊教育学研究 第  
39 卷 第 3 号
- 夏堀撰 (2003) 障害児の「親の障害受容」研究の批判的検討 社会福祉学 第 44 卷 第  
1 号 23-33
- 柳楽明子・吉田友子・内山登紀夫 (2004) アスペルガー症候群の子どもをもつ母親の障害  
認識に伴う感情体験—「障害」として対応しつつ、「この子らしさ」を尊重すること—  
児童精神医学とその近接領域 第 45 卷 第 4 号 380 - 392
- 大野雄一・長谷川智子 (2011) 母親の障害受容に影響を与える要因についての因果モデル  
の検討 発達障害研究 第 33 卷 第 4 号 404-415
- Olshansky S (1962) : Coronic sorrow : A response to having a mentally defective child.  
*Social Casework* 43 190-193
- 山根隆宏 (2010) 高機能広汎性発達障害児をもつ母親の障害認識の困難さ 神戸大学大学  
院人間発達環境学研究科 研究紀要 第 4 卷 第 1 号 151 - 159
- 山根隆宏 (2011) 高機能広汎性発達障害をもつ母親の診断告知時の感情体験と関連要因  
特殊教育学研究 第 48 卷 第 5 号 351-360
- 山崎せつ子・鎌倉矩子 (2000) 事例報告：自閉症児 A の母親が障害児の母親であることに  
肯定的な意味を見出すまでの心の軌跡 作業療法 19 卷 5 号 434-444